

## 優秀賞

テーマ…未来のための今を生きる  
『『生きる』という選択く強くなるために』

埼玉県立宮代特別支援学校高等部3年 須藤 優斗

私は脳性まひという障がいを持って生まれてきた。小学校から中学校までは一般の学校に通ってきた。そこで直面したのがいじめだった。いじめられるとすぐに泣いてしまふ弱い人間だった。

そんな中で私の人生を大きく変えたのが、中学2年生の時に生徒会長に立候補したことだった。自分にもできるという自信をつけたからだった。私は口の周りの筋肉にも緊張が入ってしまうので、話し言葉が伝わりにくいことがある。今までいじめにあつて発音のまねをされたことが多々あったため、トラウマでもあった。生徒会の立会演説会では600人近い生徒の前で話すことに、不安や罵声(ばせい)が来ないかという恐怖で心臓が張り裂けそうだった。でも、自分で立候補したんだからやり通すと決心した。演説を終えた瞬間に罵声が来なかったという安心感とやりきった達成感が大きかった。結果は見事当選。喜びと同時に「なぜ私が」という疑問もあったが、大きな自信となった。

そんな喜びもつかの間、私はある出来事に直面した。「須藤君の生徒会の演説のまねをしてたよ」と友人から伝えられた。数日後、友人から教えられた生徒と先生で話し合いをした。先生が最初に「何か言わなきゃいけないことはある？」と友人に問いかけた。返答は「何も無い」。私は溢れんばかりの大粒の涙を流し、体ごと崩れ落ちた。ショックだった。悔しかった。友人とは中学2年から仲良くなり、一緒に外出する予定もあった。裏切られた。初めての感覚だった。

教室に戻ると休み時間だった。教室には30人以上の生徒がいた。教室に入った瞬間、私は恐怖を感じた。優しいはずの皆の顔が笑っているように見えた。高々と声を上げ、私に人さし指を向けながら。私は人間不信になっていた。

そこで先生にお願いして、別室で休むことにした。部屋ではずっと泣いていた。さまざまな感情とともに、両親の顔が頭の中から離れなかった。悔やんでいる顔が浮かんできた。毎回、このようないじめが起ると、父は私に「ごめんね」という。その言葉を聞いていた私は自分のふがいなさに怒りを感じた。自分のせいで、両親は大変な思いをしている。自分の心にたたみかけた。その時、人生で初めて「死」を意識した。生きている心地がしなく、「死にたい」と思った。

私は学校を飛び出し、人けのない駐輪場に泣きながら座り込んだ。私が死んだら、いじめたやつらは世間から一生非難されると思っていた。両親の負担がなくなるとも思っていた。私の弟妹も兄が障がい者という複雑な心境なのかもしれない。11月の寒さと小雨が降るなか、私は「死」を一瞬覚悟した。しかし、先生に見つかった私は保健室のベッドに運ばれ先生に叱られた。学年主任からは「何やってるの。心配かけて」。印象に残っているのが体育の先生から言われた「もっと強くなれ」という言葉だ。初めは理解できなかった。まるで私が悪いみたいだ。今思えば、なぜ駐輪場に隠れたんだろうか、分かりやすい場所だった。私は見つけてほしかったんだ。暗く孤独な世界から引き上げてほしかった。腐食された心も。

私は今、特別支援学校に通っている。そこには私よりも苦しみ、社会と闘っている生徒が何人もいる。いつも笑顔で、皆に元気を与えている。私は本当に弱い人間だと思い知らされた。今では「もっと強くなれ」の意味も分かる気がする。紛れもなく私に与えられたまひした身体。障がいは重荷なんかじゃない。私の武器であり、自慢できる能力だ。私はこの身体で生まれてきて本当に良かった。もう世間からの私に対する批判なんて怖くない。

どんな批判でもかかってこい。  
「私は批判された数だけ強くなる」